

1月2日、羽田空港での日航機と海保機の衝突事故で考える
 —専門用語は正確に身に付け、確実に運用しよう—

開倫塾

塾長 林明夫

Q：1月2日に発生した、羽田空港での日航機と海上保安庁機の衝突事故について、どのようにお考えですか。

A：1. (1)まずは、この事故でお亡くなりになった海上保安庁機の5名の乗員の皆様のご冥福を心よりお祈り申し上げます。また、被害にあわれた日本航空の乗客・乗員379名の皆様と海上保安庁の機長様に心からお見舞い申し上げます。



(2)1月10日までの報道をまとめると、どうやら、この事故は機器類の故障ではなく、海上保安庁機が羽田空港からの指示を誤認し、滑走路に入り40秒間停止、そこに日本航空機が着陸し、衝突して発生したようです。

(3)この報道が事実であるとしたら、管制官および機長・副機長のヒューマンエラーかと思われます。

(4)このヒューマンエラーの結果、副機長自身を含め5人は死亡。日航機の乗客・乗員379名の尊い生命を、生存の危機に陥れ、2つの航空機は全焼。1週間にも及ぶ、欠航、羽田空港の機能の一部停止など、甚大な災害を引き起こしたといえます。

2. (1)私は、事故の一報に接した瞬間、管制官とのやり取りはすべて英語で行われるため、機長・副機長の英語の運用能力の欠如が事故原因ではないかと推測。事故後の報道記事をなめるように読んでおりました。

(2)管制官の「指示が認識できず」、「指示を誤認」した原因は何か。

(3)「管制官の指示を『理解』できなかった」ためであるとするならば、「指示が理解できなかった原因」を追究すべきかと考えます。

(4)「管制官が指示に用いる英語」が、声の大きさ、発音、表現方法など、すべてわかりやすい英語であったのか。

(5)「機長・副機長の英語によるコミュニケーション能力」の問題です。

(6)具体的には、「英語の4技能」の内、「リスニング(聞き取り)能力」の前提として、管制官・機長・副機長の「専門用語」についての基本的理解がここで問われます。



3. (1)狭いコックピットの中、大きなエンジン音はじめ、様々な雑音の飛び交う中で、専門用語を用いての管制官との英語でのやり取りは、「素人」から見れば、想像を絶する「難しさ」かと推測できます。

(2)それでも、その「難しさ」を乗り越え、管制官とパイロットが力を合わせ、航空機の安全運航と、毎日何十万人もの乗客・乗員の生命を守るために、「英語によるコミュニケーション」を行なっていると考えます。業務で用いる「ことば」の「定義」を正確に「理解」し、「定着」させて取り違えないことは、基本中の基本です。

(3)①「プロの専門職」として「専門用語を完全にマスター」し、「英語によるコミュニケーション」を行うことは、人々の生命・安全・財産を守ることに直結します。

②「英語によるコミュニケーション」の欠如、「ことばの意味の取り違い」は、大惨事に直結するからです。

③管制官および機長・副機長は、表現方法を含め、どのような「専門用語」の「英語研修」を受けたのか。



4. (1)①普段からどのように「英語によるコミュニケーション能力」を高める「トレーニング」「学習習慣」「生活習慣」をしているのか。

②「読んでわからないこと(内容)は、聞いてもわからない」ことは、「語学学習の基本」です。

③「リスニング能力」育成の基本は、「読解力」の育成です。

(2)＜プロの英語の使い手＞として、

①「英字新聞」「英語の雑誌」「英語の本」に、毎日親しんでいるか。

②TVやラジオ、映画は、「英語で視聴」し続けているか。

③「英語によるコミュニケーション能力」を鍛えるトレーニングに励んでいるか。

(3)プロとして英語で業務遂行する「自覚」と「責任」が問われているのが、今回の衝突事故と考えます。皆様はどのようにお考えですか。ぜひご議論ください。



5. 379名の日航機の乗客・乗員全員が脱出できたのは、乗務員の皆様の高い志に基づいた訓練の賜です。ありがとうございました。また、乗客の皆様の他を思いやる心、自制心の高さによるものです。日本人の素晴らしさがよくわかりました。誇るべきことと考えます。

○以上は、CRT ラジオ栃木放送、開倫塾の時間「林明夫の歩きながら考える」1月13日放送内容資料です。毎週土曜日9時15分～9時25分まで放送、本年3月で、38年目に入ります。1月10日12:00からCRTスタジオで収録しました。

Q：学習塾・予備校・私立学校の経営幹部の先生方にお伝えしたいことは何ですか。

A：(1)教え子の中には、パイロットや管制官だけではなく、英語や数学、様々な教科を基本に業務を遂行する専門職に就く人材がたくさん出てきます。

(2)勉強の仕方や、各教科の本質的理解をしっかりと伝えるのは、先生として最重要業務であると自覚し、立派な人材育成にお励みください。

(3)その先生方の潜在可能性に気付かせるのが、経営幹部の先生方です。よろしくお願ひいたします。

Q：最後に一言どうぞ。

A：今月も、僭越ではありますが、お読みいただければ、必ずご参考になると思われる本をご紹介します。



(1)一冊目は、言語学者、鈴木孝夫先生著「日本人はなぜ日本を愛せないのか」新潮選書、新潮社、2006年1月25日刊。同著「あなたは英語で戦えますか、国際英語とは自分英語である」富山房インターナショナル2011年9月19日刊です。「英語で戦える人材育成」と、「国連の第7番目の公用語に日本語を」というご主張には、全面賛成。

(2)二冊目は、「西田幾多郎哲学論集Ⅲ、自覚について、他四編」岩波文庫、岩波書店1989年12月18日刊です。「教育の成果を決定する要因」は、「本人の自覚」と「教師の力量」であると梶田叡一先生からお教えいただいて以来、「自覚をもって学ぶ」とは何かを考えるようになりました。そして、「自覚を促すことは、教師の力量に含まれる」と考えるに至りました。この西田幾多郎先生の「自覚について」は、とても参考になります。

(3)三冊目は、梶田叡一先生著「自己意識の心理学」自己意識論集Ⅰ～Ⅴ(全5巻)、東京書籍、2020年7月29日刊です。同著「＜自己＞を育てる、真の主体性の確立」金子書房1996年5月30日刊、同著「教育評価」有斐閣双書、有斐閣、2010年9月10日第2版補訂2版、この合計7冊の梶田先生のご著書は、「自覚をもって学ぶ力」「主体的に学ぶ力」を身に着けるにはどうしたらよいかをお考えになるときに、とても参考になると確信します。2024年の読書として、ぜひご挑戦を。

(4)四冊目は、和辻哲郎著「人間の学としての倫理学」岩波文庫、岩波書店2007年6月15日刊です。同著「日本倫理思想史(一)～(四)全四冊」岩波文庫、岩波書店2011年4月15日刊をお読みになったら、和辻先生の名著「人間の学としての倫理学」にもぜひご挑戦ください。三木清著「構想力の論理(第一、第二)」岩波文庫、岩波書店2023年7月23日刊や、小林秀雄著「考えるヒント1～4」文春文庫、文芸春秋社刊、丸山眞男著「日本政治思想史研究」東京大学出版刊などが、一気に読みやすくなります。



(5)第五冊目は、フローベール作「ボヴァリー夫人(上)(下)」岩波文庫、岩波書店1939年4月17日刊です。フランス近代小説の祖、写実主義を確立した、フローベールの自然描写、心理描写は感動的ですからあります。取材に取材を重ね、この一作に4年半かけた、正確無比、美しい自然描写、情景描写は、清少納言を思い起こさせます。ぜひご一読ください。

(6)本年はじめてのシェイクスピアは、松岡和子訳「トロイラスとクレシダ」、シェイクスピア全集23、ちくま文庫、筑摩書房、2012年8月10日です。このシェイクスピア全集33巻を、年に数冊ずつ読み進めるのも、趣ある人生につながると考えます。

